



Data	
監督・脚本:	リー・ユウ (李玉)
プロデューサー・共同脚本:	ファン・リー (方励)
製作:	ファン・リー (方励)
出演:	シルビアン・チャン (張文嘉)
	／ファン・ビンビン (范冰冰)
	／チェン・ポーリン (陳柏霖)
	／フェイ・ロン (肥龍)／チン・ジン (金晶)／ファン・リー (方励)

👁️👁️ みどころ

李玉 (リー・ユウ) 監督と范冰冰 (ファン・ビンビン) が組んだ前作『ロスト・イン・北京』(07年) は范冰冰の激しいセックスシーンが評判だったが(?) が、ホントは「カネがすべて」となった現代都市・北京で生きる男たちへの問題提起作。打って変わってその第2作は、心に悩みを抱える一人の中年女性と3人の若者たちの、ブッダ・マウンテンへの旅を通じた、奥深くかつ敬虔な物語だ。

彼らが抱える悩みとは? 煩悩とは? その捌け口は一体どこに? 四川大地震からの復興と再建を目指す観音山で、彼らはどのように目覚め、成長していくの? 小さいながら奥深い物語を、老若3人の名優と一人の「太っちょ」が見事に表現! しかして、あなたの、煩悩からの解放は・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 范冰冰の名前だけで、こりゃ必見! ■□■

日本では、サントリー・ウーロン茶のコマーシャルに出演している中国美人女優が、范冰冰だと知っている人は多いはず。また、アンディ・ラウと共演した『墨攻』(06年) (『シネマルーム17』128頁参照)、ジャッキー・チェンと共演した『新宿インシデント』(09年) (『シネマルーム22』未掲載)、ドニー・イェンら豪華キャストと共演した『孫文の騎士団』(09年) (『シネマルーム26』143頁参照)、チェン・カイコー監督の問題提起作『運命の子』(10年) (『シネマルーム28』155頁参照)、韓国のチャン・ドンゴンと共演した『マイウェイ 12,000キロの真実』(11年) (『シネマルーム28』86頁参照) などの話題作に出演している范冰冰を知っている人も多いはずだ。しかし、李玉監督がはじめて彼女を主演に起用した『ロスト・イン・北京』(07年) (『シネマルーム30』136頁参照) や本作は単館での上映を予定したもので、宣伝に金をかけていない

から知らない人が多いのでは？

范冰冰がド派手なセックスシーンに挑戦した『ロスト・イン・北京』は経済成長を遂げた現代都市・北京を舞台としたすばらしい問題提起作で、「金がすべて」という時代状況の中で失われた人間性をしっかり問いかけていた。それに比べると、范冰冰が反抗期の女の子・南風（ナン・フォン）役を演じる本作はセックスシーンが皆無に近い。そして、心に大きな傷を抱えた、今は引退した元京劇女優・常越琴（チャン・ユエチン）演じる張艾嘉（シルビアン・チャン）の登場に合わせるかのように、タイトル（原題『ブッタ・マウンテン（観音山）』）に象徴されるような奥深くかつ敬虔な雰囲気になっている。とは言っても、本作は決して「線香臭い」映画ではない。

「ブッタ・マウンテン（観音山）」は08年5月12日の四川大地震で倒壊した菩提寺のある山の名前で、本作後半ではその観音サマが再建される様子が描かれる。南風や常越琴は、なぜそのブッタ・マウンテンを目指したの？本作の舞台は四川省の省都である成都。残念ながら私はまだ行ったことがないので、本作を観ることによって現代都市・成都の雰囲気味わうとともに、あわよくばブッタ・マウンテンの空気も吸い込んで、彼女らとともに私の煩惱も解き放ちたい。それはともかく、范冰冰が主演する映画というだけで、本作は必見！

■□■いかにも無軌道な3人の若者たちは？■□■

最初にスクリーン上で見る南風の姿はド派手な衣装を着て、クラブ歌手として歌っているものだが、これがなかなかセクシー。ところが、マイクを振り回しながら歌っていると、

第23回 東京国際映画祭 最優秀芸術貢献賞・最優秀女優賞



『ブッタ・マウンテン～希望と祈りの旅』発売・販売元：マクザム
(C) LAUREL FILMS

ついマイクが飛んで行き、ステージのすぐ前に立って一緒に歌っていたオッサンの股間にあたったから大変。そこでオッサンから因縁をつけられている南風に助け船を出した(?)のが、いつも南風と行動を共にしている、ハンサムながらどこか陰のある若者・丁波(陳柏霖)と、一見ノー天気そうだがさまざまな問題ありの若者・肥皂(太っちょ)(肥龍)の2人だ。「賠償金を取ってやる!」「店を首にしてやる!」と叫ぶオッサンを丁波は実力を使用して退散させてしまったが、その報復は?

田舎から成都という大都会に出てきている南風が携帯で話している姿を見ると、彼女は自分の母親に対して暴力を振るう大酒飲みの父親に耐え切れず、故郷を飛び出してきているようだ。また、真面目にバイトをしているらしい丁波は、母親が死んだ時に、父親が別の女のところに居たことが忘れられないうえ、近々父親がその女と結婚するという話を聞いてイライラが最高潮に達しているらしい。さらに「太っちょ」の父親は金持ちらしいが、この体格ではいくら性格が良くてもいじめの対象にされてしまうのは仕方なし・・・?

彼らはいかにも現代っ子。また、中国ではいわゆる「80年后(バーリン・ホー)」と呼ばれる「一人っ子政策」の下で育った、少しわがままで自分勝手な若者たちだ。『ジャイアント』(55年)、『エデンの東』(55年)、『理由なき反抗』(55年)でのナイーブな若者役で一躍全世界の人気者となった途端に亡くなってしまったのが、アメリカの俳優ジェームズ・ディーン。李玉監督が描くこれら3人の若者たちの行動を見ていると、必ずしも無軌道なだけではなく、ジェームズ・ディーンと同じような、ナイーブさも・・・。



『ブッダ・マウンテン〜希望と折りの旅』発売・販売元：マクザム
(C) LAUREL FILMS

■□■元京劇女優と若者たちとの接点は、間借人募集から■□■

元京劇女優でプライドの高い常越琴（張艾嘉）は一人で広い家に住んでいるが、経済的に困ってきたためか、間借人募集の看板を家の前に掲げることに。本作は09年の成都での物語だから、常越琴はネット上でも広告したのかもしれないが、それを知った南風たち3人の男女がこれに応募してきたところから、元京劇女優と3人の若者たちとの「接点」が生まれることになる。現在、日本では「脱法ハウス」が社会問題になっており、毎日新聞がそれを追いかけている。今の日本では下宿や間借りという概念はもちろん、トイレや洗い場を共有するアパートという概念もほとんどなくなり、狭くとも小奇麗なワンルーム・マンションに代わっている。約60㎡の部屋に10人以上を同居させる「脱法ハウス」は大問題だが、本作に見る風景は、私の大学時代にはあたり前の存在だった「間借り」というスタイルだ。

男2人が1部屋、女が1部屋になったのは当然だが、トイレやキッチンが共通だから、いくら常越琴が「私の物は動かさないこと」と厳命しても、そりゃ無理というもの。また、互いのプライバシーを保護しようとしても、常越琴自身が朝早くから京劇のCDを回しながら大声での独特の節回しの練習をするのだから、若い男女はたまったものじゃない。しかも、当初は「赤の他人」としてお互いに遠慮していたが、常越琴が南風のジーンズを勝手に郵便受けに改造したり、南風が賠償金を支払わなければならなくなった際には、丁波が勝手に常越琴の部屋に入り込んで、隠していた箆筒貯金(?)を盗み取ったり、男女4人の共同生活はかなりハチャメチャに。こうなると、そもそも間借りから始まった共同生活自体が崩壊するのが普通だが、そうならないところが本作のミソ。それは、共同生活の中で否応なく見えてくるそれぞれが持つ心の悩みに対して、それぞれが真剣に向き合い、やさしい姿勢を示すからだ。

一見、今を無軌道に生きているだけに見える3人の男女が、それぞれに抱える心の悩みとは？また、あんなに偉そうに振る舞い、かつ自分の内面を一切外に見せない常越琴が、なぜボロボロの車を大切に車庫の中に置いているの？ある日、常越琴の家を訪ねてきた片足のない松葉杖の女の子、林月（金晶）はいったい何者？さらにその場で思いっきり吐き出された、常越琴の心の中に秘めた苦い苦い思いとは？

■□■交通事故の悲惨さはどこでも同じ！■□■

日本では『0（ゼロ）からの風』（07年）（『シネマルーム15』214頁参照）、アメリカでは『帰らない日々』（08年）（『シネマルーム20』133頁参照）。私が交通事故に関する講演で、その悲惨さをアピールするためのネタとしていつも使うのがこの2本の映画だ。日本では、飲酒！暴走！轢き逃げ運転によって交通事故が発生した場合の「厳罰化」の流れはここ10年間で定着してきたが、日本以上にモータリゼーションが進み、大気汚染と高速道路の慢性的な渋滞に悩む中国での交通事故での悲惨さは？、李玉監督は直接的な映像での説明はしないが、常越琴の自慢の一人息子が車で彼女と走っていた時、鉄骨を積んだ車と衝突し、鉄骨が息子の頭に突き刺さったことによって息子が死亡すると

もに、彼女も足に大怪我を負ったことが、あれこれの話を総合すれば見えてくる。つまり、あのボロボロの車はあの交通事故の残存物で、常越琴が息子を思い出し、「共通の時間」を持つための小道具(?)になっているわけだ。

クラブで歌っていた南風によって股間を傷つけられた男からの損害賠償請求を受けて、南風は丁波たちの協力を得て（といっても、常越琴から盗んだお金によって）、やむなく20万円（約30万円）の賠償金を支払っていたが、まだこの盗みはバレていないらしい。また、一つの家で共通の時間を過ごしているうちに、世代の違う常越琴と3人の若者たちの障害が少しずつ取り除かれ、一人息子を悲しい交通事故で失った常越琴の苦しみを、3人の若者たちが共有するような仲になってきたらしい。また、丁波が別の女の子からの積極的なモーションに応じてエッチしている姿を見たことによって悲しみに暮れていた南風は、今や常越琴のベッドの中で常越琴に添い寝をしてもらうことによって、心の安らぎを得るところまでに。4人の中がここまで良い雰囲気になれば、常越琴だっていつまでも過去の交通事故の苦しみにこだわってはい駄目だと悟り、思い切って、その事故車を大修繕することに。いまの日本なら、ボロボロの車を大修繕するくらいなら新車を買ったほうが良かったが、それはまた別問題。見違えるように生まれ変わった車に乗って、4人が出かける先はどこ・・・？そして、そこから4人はさらにどんな発見をすることに・・・？それが、本作後半の大きなテーマだ。

■邦題のサブタイトルは、本作にジャスト・フィット！■

日本は地震国だが、中国でも76年7月28日の唐山大地震、08年5月12日の四川大地震など地震はたくさんある。中国は障子や木造による日本家屋と違い、田舎でも土や石で作られた家だから地震には強いはずと思っていたが、意外にそうでもないようだ。成都に住む常越琴と3人の若者たちが、大修繕が終った車に乗って震災1年後の四川大地震の現場を訪れてみると、その復興はまだまだ。地震によって倒壊したブッタ・マウンテンもほとんど再建できておらず、尊い観音サマも倒れたままだ。しかして、そこから始まる、ブッタ・マウンテンと観音サマ再建の道のりとは？

1995年1月17日の阪神・淡路大震災でも2011年3月11日の東日本大震災でも、日本の若者たちがたくさんボランティアとして活動したこと、そしてその中で今どきの軟弱でいい加減な若者たちも、少しづつシャキッとした若者に成長していったことはマスコミでもよく語り継がれている。すると、息子の死亡によって心に大きな悩みを抱えていた常越琴や、家族のことで悩みを持ち今をどう生きるべきかを定めることが出来なかった3人の若者たちも、ブッタ・マウンテンや観音サマの再建活動にボランティアとして参加し、汗を流し続けていると・・・。私は説明調が多い最近の邦題には異論があるが、本作の邦題のサブタイトル『～希望と祈りの旅』は、本作の後半からクライマックスにかけての物語の展開にジャスト・フィットしているから、久々にみるヒットだ。女優・范冰冰はともかく、李玉監督や単館上映しかされない本作は日本人にとって馴染みの少ない作品だが、ぜひ多くの日本人に鑑賞して欲しいものだ。

2013（平成25）年9月10日記